



Title	上方能楽史の研究
Author(s)	宮本, 圭造
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41997
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 宮 本 圭 造

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 1 5 1 0 8 号

学 位 授 与 年 月 日 平成12年 3 月 24 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

文学研究科芸術学専攻

学 位 論 文 名 上方能楽史の研究

論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 天野 文雄

(副査)
教 授 平 雅行 助教授 永田 靖

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、主として安土桃山時代から江戸中期ころにおよぶ、近世の上方における能楽（能および狂言）の実態を、役者・愛好者・保護者・上演環境といった諸点から論じたものである。全体は、第1章「京都の能楽」、第2章「南都の能楽」、第3章「神事猿楽の動向」、第4章「上方諸藩の能楽」という4章からなり、分量は400字詰原稿用紙にして810枚の論文である。

第1章の「京都の能楽」は全6節からなる近世前期の京都を中心にした能楽の実態についての論である。すなわち、第1節「能楽サロンの形成」では、青蓮院主慈性や摂家二條康道の能楽愛好の事例をとおして公家社会における能楽サロンというべきものの存在を指摘し、第2節「その後の手猿楽渋谷」では、京都住の手猿楽（商人や武士出身の専業役者）として著名な渋谷について、従来あまり明確でなかった安土桃山時代～江戸中期の歴代の動向を、禁裡での演能や紀州藩お抱え役者としての活動をとおして明らかにし、第3節「能大夫小畠左近衛門了達とその一族」では、宝永7年（1710）に86歳で没した京都の喜多流手猿楽で、尾形光琳の師匠でもあった小畠了達とその一族の役者としての活動を、北七大夫との関係や禁裡・阿波藩での活動をとおして詳細に論じ、第4節「手猿楽深見考」では、新出の『深見系図』をもとに、ほとんど不明だった京都の手猿楽深見の系譜を、秋田藩佐竹家との関係を中心に論じ、第5節「かん松大夫考」では、慶長～万治の諸記録にみえる本願寺ゆかりの「かん松」（「かん松」は「亀松」「勘松」「鴨松」「神松」などと表記される）と呼ばれる役者の素性を考察し、第6節「日吉社神事能と京都の能役者」では、叡山文庫所蔵の日記類をもとに、元禄・宝永期の日吉社神事能の状況とそれに参勤した京都の能役者の動向を紹介している。

第2章「南都の能楽」は、第1節「江戸初期奈良能楽界の動向」と第2節「南都禰宜衆の演能活動」の2節からなる。すなわち、第1節「江戸初期奈良能楽界の動向」では、慶長・元和期の南都における公儀お抱えの四座役者や春日社の禰宜あるいは奈良の町人たちによる能楽愛好のさまと、彼らをとりまく茶・連歌などの文化的環境を、春日社や興福寺関係の記録を活用して明らかにし、第2節「南都禰宜衆の演能活動」では、江戸中期には100人をこえる勢力を誇っていた春日社の禰宜役者による室町末期以来の広範な演能活動を、昭和初年のその活動の終焉にいたるまで、広く収集した膨大な資料に基づいて通史として跡づけている。この南都禰宜衆の演能活動についての論考は15の項目からなる300枚（400字換算）におよぶ力編であり、そこでは、禰宜役者の本拠地たる南都や大和での活動はもとより、禁裡・仙洞での演能、京都・山城・大坂・河内・近江・伊賀・伊勢・越前・紀伊などの神事能や勧進能での活躍、尾

張藩・仙台藩・熊本藩・彦根藩・土佐藩・徳島藩・鳥取藩などの諸藩に召し抱えられた禰宜役者の実態など、能楽史研究にとって重要な禰宜役者をめぐる多くの問題が詳細に論じられている。

第3章「神事猿楽の動向」は、主として畿内の神事能という場をめぐって、そこに参勤した役者や座の動向を論じたもので、以下のように4節からなっている。第1節「喜志猿楽考」では、室町時代の天文ころから江戸時代後期までに、紀ノ川流域の神社の祭礼に参勤していた喜志猿楽の歴史にかかわる諸問題を論じ、第2節「播磨の神事猿楽」では、播磨の能役者の事績と彼らが参勤した播磨総社神事能の特異な実態を紹介し、第3節「丹波の神事猿楽」では、中世以来京都で活躍していた丹波猿楽のうち、矢田大夫・初大夫・祐大夫・八子大夫の主として江戸時代における活動をたどり、第4節「江戸期の日吉大夫」では、不明な点が多かった江戸時代の日吉猿楽の系譜やその芸系（宝生流）を豊富な資料をもとに解明している。

第4章「上方諸藩の能楽」は、3章で構成されている。第1節「上方諸藩における能楽の概況」では、津藩（藤堂家）・彦根藩（井伊家）・高槻藩（永井家）・宮津藩（京極家）などにおけるお抱え役者を中心にした能楽の状況を概観し、第2節「紀州徳川藩の能楽」では、初代頼宣から6代宗直ころまでの紀州藩の能楽の状況を確実な資料に基づいて概観し、第3節「宇陀松山藩の能楽」では、宇陀松山藩の藩政記録をもとに近世中期ころの同藩の能楽の状況を紹介します、国元では禰宜役者との関係が、江戸表では宝生座との関係が深いことなどを指摘する。

また、末尾には、「資料編」として和歌山県立文書館所蔵の紀州藩お抱え役者の由緒書の一部の翻刻が掲載される。

論文審査の結果の要旨

700年におよぶ能楽の歴史的研究のうち、近世（江戸時代）を対象としたまとまった研究は大正末年に刊行された池内信嘉氏著『能楽盛衰記』（2巻。上巻が江戸時代の能楽史研究）をもって嚆矢とする。しかし、以後はさしたる進展をみることなく半世紀ちかくを経過し、近世初期に成立した喜多流の歴史の総合的研究である表章氏著『喜多流の成立と展開』（平成6年。平凡社）によって、ようやく研究の基盤が整うにいたった。本論文は、そうした研究史をうけて、近世の能楽史研究を飛躍的に進展させた画期的な業績である。

上記の論文内容の要旨からもうかがえるように、本論文における顕著な特色は、なによりも、直接能楽にかかわる能楽資料ではない、公家や寺社関係の記録資料の大量の発掘とその的確な活用である。本論文に用いられているそうした資料は、従来は能楽史研究はもとより、他の分野でも利用されていなかったものが多いが、本論文では、膨大な記録資料から能楽史研究にかかわる記事を大量に見い出して、それに既知の能楽資料とをあわせることによって、近世能楽史のまったく知られざる実態を解明し、あるいは「点」としてしか知られていなかった事柄を「面」として提示することに成功している。そのようにして解明された近世能楽史の諸相の概略は上記の要旨のとおりであるが、そのような成果とともに、本論文は近世能楽史研究に有用な膨大な資料の存在を学界に知らしめたことと、それを用いての新しい視点からの研究法の提示という点でも、画期的な意義を有していると言えよう。

また、本論文が対象としているのは、近世の上方の能楽であるが、それはおのずから観世・金春など公儀お抱えの役者による演能活動ではなく、素人役者による演能活動についての解明という結果を招来している。能楽史の重要な一郭をになう素人役者の室町後期～近世初期の動向については能勢朝次氏著『能楽源流考』以来かなりの研究の蓄積があるが、近世におけるその動向は前記の『喜多流の成立と展開』によって、ようやくその緒についたばかりという状況であった。本論文はそうした近世の素人役者についての最初のまとまった研究であり、その点でもまことに貴重な業績と言わざるをえない。その素人役者についての研究成果の概要はこれも上記の要旨のとおりだが、とりわけ南都禰宜役者の演能活動を詳細に跡づけて、それをみごと通史としてまとめあげた論考は、質量ともに特筆すべき一編と言えよう。この論考は、禰宜衆の活動の実態の解明というだけでなく、その活動をとおして、近世における素人役者と玄人役者の交流や、上流公家の文化サロンをはじめとするさまざまな場における能楽愛好の諸相を解明した点で、従来の公儀お抱え役者に偏した研究に強く見直しをせまるものとなっているが、それは本論文全体に言えることでもある。

近世能楽史研究としての本論文の意義はおよそ以上のとおりであり、よって、本研究科は本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい価値を有するものと認定する。